

て、獲物を見つけた鷹のようにまっしぐらに突き進んでこられます。

しかし私の方は、テーマを見ればフツフツと文章が湧く先生のようにはいかないわけで、しかも私の分担は初期の頃なので、昭和35年から40年代といえれば約30年も前のことです。思い出だけではとても持たないので、それこそ衛生指導員さんに電話をかけたたり、古い資料を引っ張り出したりして、どういうストーリーで起承転結をはかるかを、考えるのは容易ではありません。うろろうろとして遅くなっていると「そろそろ締切りだけど、できたかしら」と優しいお声で催促の電話がかかります。

ちょうど平成12（2000）年の4月に私は、上田市にある長野大学に教員として就任したばかりで、慣れない福祉の授業の展開に任せてこ舞いの頃でした。福祉を目指す大学生に介護概論や介護技術、現場実習クラスの担任などを受け持って、上田通いの毎日です。

専門外の介護の授業を担当せざるを得なかったのは、大学には看護や保健といった教員がこれまで一人もいなかったもので、その資格だけでどうしてもと懇願されてしまったことと、身内の介護体験があったこと、介護保険の開始に向けたケアマネのテキストを少し勉強してあったことからです。そして、何といっても八千穂村との40年近いお付き合いの中で、次第に高齢化してゆく村の姿や、人々の暮らしの変化を身近に感じ、地域の健康管理の仕事の中に、介護に目を向けた活動が必然的に始まっていて、八千穂村を通して地域の実情がわかっていったことか

からです。また、後に北信総合病院長となられた今は亡き磯村孝二先生と脳卒中の登録システムによる寝たきり予防の仕事がやれたこと、保健婦の井出今さんがそれを受けた形で、どこよりも先に八千穂村で、地域リハビリに身を張って取り組んでくださったことなどもあり、これらが授業に大いに役立って大変ありがたいことでした。

しかしそれだけに、八千穂の原稿に取り掛かるにはネジを180度くらいひねって、頭をそちらに向けられないことには始まり、ぎりぎりセーフといった危うい状況で、松島先生にはずいぶんご迷惑をおかけしておりました。

昭和40年代に入った主婦たちの工場通いのテーマの時などは、村内に納屋工場があちこちで始まり、兼業化が一気にすすんだ頃でした。萩原篤（元事務長）さんの研究データではいろいろ判っていても、記事には生の声を伝えたいという思いがありました。衛生指導員の何人から当時の工場で働いていた方を紹介してもらい、電話で思い出していたく形で取材して、改めて健診会場では聞けなかった当時の「三ちゃん農業」や母ちゃんの工場づとめの様子が理解できたものです。

また、貧血とか栄養などを取り上げる時に、ヤギを飼って栄養を補おうという話題になったけれど、どこからヤギを手に入れるのかと調べてみると、なんと当時は（今もかな？）佐久市の種畜牧場が日本中のヤギの買い付け市場のような役割をしており、「ヤギ牧場」といわれて

遠くは九州や秋田の方からも買いに来るような、全国区の貴重な場所だったということがわかりました。ものを書くということはその気になって取材したり、データをそろえたりしないと話が弾みません。こうして衛生指導員や八千穂村のことを文章にすることで、改めて自分のやってきた仕事や郷土の価値など知ることができ、とてもありがたい時間となりました。

私は八千穂村が好きです。よそで八千穂村の名前を聞くと胸がどきどきと高まります。考えてみれば八千穂村は、私の38年間の佐久病院での仕事のすべてを通した拠点です。戦後の農村の復興から、次第に高度経済成長に伴う変貌をしてゆく姿、農村社会の中で起きる様々な暮らしの出来事や、心身への影響をずいぶん教えていただき、一緒に歩んで勉強させていただいた「母なるふるさと」といった思いになるところです。

今回、八千穂村健康管理50周年記念の冊子を纏めるにあたって、「衛生指導員ものがたり」が別冊で出されることになり、改めて振り返ると、まさに健康管理の仕事は衛生指導員に支えられて成り立ったことばかりです。佐口での冷えの研究、大石では農民体操、耕運機の事故や農繁期の疲労調査、うその口では泊り込み健診もありました。穴原や崎田では農薬調査、栄養グループで活躍された方々との交流、各集落の全戸訪問などや健診のあり方・事後指導の進め方などの検討まで、そうした農村医学の原点となるような事柄は、ほとんど八千穂村から学んだことばかりです。その陰にはいつも衛生指導員の面々の存在があります。集落に入る時の拠

点はまず彼らの家や畑で、地図を片手に訪問先を教わりながら、いつの間にか村内の出来事や昔の風習、農産物のことなどの話題になり、それがずいぶん勉強になって楽しい仕事になっていました。

若い時代のこうした体験は一生の宝です。本当にお世話になりました。ありがとうございました。

2011年3月

佐久総合病院健康管理部元保健婦長

横山 孝子

あとがき 住民参加の実例を訴えたい

「衛生指導員ものがたり」を書こうという話しが出たのは、今から15年ぐらい前のように記憶しています。

当時私は、健康管理センター・健康管理部に所属し、集団健康スクリーニングという健診やがん検診の実施、地域との打ち合わせなどで長野県下を飛び回っていました。健診は、日曜日の午後に病院を出発、そして帰院は金曜日の夜というスタイルで、月1〜2回これに参加するというものでした。

もちろん地元での健康管理活動にも力を入れるという職場の方針の中、八千穂村担当にもなっていました。八千穂村全村健康管理の活動は、夜の時間帯の参加が多く、終わると一杯となるわけです。村の「飲み屋」さんで行かない店は一軒もないという状況でした。

秋ごろだったと思います。ある日「巡回健診隊」（当時の若月院長が命名）の定宿となっている飯田市のY旅館に、皆とは別行動で松島松翠先生（現名誉院長）が到着しました。松島先生は当時佐久病院の副院長兼健康管理部長をされていて、長野市での会議が多く、飯田に2時半頃着の列車で健診に参加されることがしばしばありました。

長野で宴席があったらしく、その夜先生は珍しく酩酊されていました。そして私と飲み直そうということ、宿の食堂でビールを傾けました。

そのとき、先生が突然、「飯嶋君、いっしょに本をつくらないか。八千穂村の衛生指導員ものがたり」というのはどうかね」と話されたのです。思いもかけないことと、私にそんな能力があるわけがないことが重なって、呆然としたのを憶えています。そのあと先生はいろいろ力説されたのですが、失礼ながらよく思い出せません。きっと、世間では保健や福祉の活動に「住民の参加」が必要とよく言っているが、実際にはほとんど出来ていない、その実例を分かりやすく訴えたい、というようなことだったと思います。

しかし、その話はその後先生の口から出てきませんでした。酔った席での冗談かと、私も内心ほっとしていました。先生も仕事がどんどん忙しくなり、平成6年1月には院長に就任され、それまでの若月院長の後を継ぎ、佐久病院の運営・経営の要として日夜奮闘されるようになったのです。

平成11年の秋ごろでしょうか。松島先生が地域ケア科の事務室にひょっこり顔を出されました。平成12年の4月から先生は院長から名誉院長に就任されることになっていました。私は1年半ほど前に地域ケア科に異動し、介護保険対応に追われているところでした。

「飯嶋君、前に話したと思うけど、横山孝子さん（前健康管理部保健婦長で前年に定年退職）

と3人で「衛生指導員ものがたり」を共同執筆したいんだけど。「農民とともに」へ連載形式でやればいいと思うけどどうだろう」とまた突然の話です。何年も前の、あの夜の会話を憶えておられたことに驚きました。横山さんとは長い間一緒に仕事をして気心がしれた仲だし、先生がついていれば何とかなるだろうと、うかつにもつい引き受けてしまいました。

それから、仕事の合間を縫って時々取材活動が始まりました。横山さんも他の仕事があり、なかなか忙しそうでした。松島先生が一番熱心で、裏付けとなる資料探しや、インタビューに何回も同行しました。この10数回にも及ぶインタビューのテープを、その都度、活字にしていた市川順子さんには心から感謝いたします。八千穂村役場のみなさん、衛生指導員OB、関係するみなさんにもご協力を頂きました。編集会議も時々開かれ、浅沼信治さん（当時農村保健研修センター所長）にいろいろお世話になりました。プランからいくと私の担当は後半部分になっており、実際には1年以上先に原稿作成かなという感じでした。そして平成12年4月「農民とともに」第85号から「衛生指導員ものがたり」の連載が始まりました。

ところが、です。私自身にとんでもないことが起こってしまいました。平成12年の秋、清水茂文院長（当時）に呼ばれ、次年度から事務長をやるようにと言われてしまったのです。もちろんそんな能力などありませんし、再三お断りしたのですが、これもついに受けてしまいました。それからの激動の日々、能力のない私はとても原稿を書く気分になれませんでした。し

かし、自分が関わった時代へと、「ものがたり」は進んできてしまいました。

松島先生も心配し「書けるだけ書いてみて、あとは僕がなんとか書くよ」と言ってくださいました。そして私への取材もしてくださいました。これが当時のことを思い出すきっかけとなり、少し書いてみようかという気もおきてきました。冬休み、5月の連休、夏休みなどに少し気分を切り換え、ある程度まとめて原稿らしきものを作ることができました。西垣良夫先生(副院長、前健康管理部長)にも激励して頂きました。書きっぱなしの原稿を修正や脚色をして「ものがたり」風にしてくださいましたのは松島先生でした。ですから、この本の制作に私が関わったのはほんの僅かにすぎません。でも仕事をとおして、苦しいこともあったけれど楽しい活動を思い起こすことができました。

松島先生にご迷惑をおかけしたことを、この紙面をお借りしお詫びと感謝をしなければなりません。横山孝子さんもご苦労さまでした。また、取材に協力してくださいましたみなさまに、心から感謝致します。高見沢佳秀さん、井出佐千雄さん、小宮山則男さん、岩崎正孝さん、内藤恒人さんや衛生指導員だったみなさん、地域保健セミナー(保健福祉大学)同窓会のみなさん、一緒に働いた仲間たちとは今でもおつきあいすることがありますし、心かようものがあります。

最後に、この「衛生指導員ものがたり」を出版してくださる佐久総合病院、統括院長夏川川介先生、院長伊沢敏先生はじめ、職員のみなさんに、心よりお礼申し上げます。

2011年3月

佐久総合病院元事務長

飯嶋 郁夫

著者紹介

松島 松翠 (まつしま しょうすい)

昭和29年、佐久総合病院外科に就職。以後、外科に従事しながら、次第に健康管理の仕事に転じ、八千穂村の全村健康管理の仕事や農薬中毒の解明と予防に力を注ぐようになる。昭和35年健康管理部長、昭和48年長野県厚生連健康管理センター部長を兼務。平成6年院長、同11年名誉院長。

横山 孝子 (よこやま たかこ)

昭和35年、佐久総合病院健康管理部に保健婦として就職し、八千穂村の健康管理の活動にほぼ初期から関わる。その後、併設された健康管理センターを兼務し、全県下の集団健康スクリーニングの開始に伴う仕組みづくりや、地域連携活動などにかかわる。

平成13年から18年まで、長野大学社会福祉学部助教授。平成20年より佐久大学看護学部非常勤講師として「健康管理と生活習慣病」を担当し現在に至る。

飯嶋 郁夫 (いじま いくお)

昭和44年、佐久病院に就職。総務課、医事課を経て、健康管理部に異動。同時に発足した長野県厚生連健康管理センターの業務も兼務し、地域健康管理活動の推進役となって活動を続ける。平成4年同課長、その後地域ケア科課長を経て、13年事務長、16年美里分院、同18年退職。

衛生指導員ものがたり

『八千穂村全村健康管理50年』別冊

2011年3月31日 第1刷 発行

著 者 松島松翠 横山孝子 飯嶋郁夫

発 行：JA長野厚生連佐久総合病院
7384-0301 長野県佐久市白田197
電話 0267(82)3131

印 刷：株式会社 佐久印刷所
